

氏名(本籍)	かわにしひろゆき 川西宏幸(徳島県)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第555号
学位授与年月日	平成元年12月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	古墳時代政治史序説
主査	筑波大学教授 岩崎卓也
副査	筑波大学教授 文学博士 井上辰雄
副査	筑波大学教授 広神清
副査	筑波大学助教授 西野元
副査	筑波大学助教授 前田潮

論 文 の 要 旨

本論文は、考古学的手法を駆使して古墳ならびに諸遺物の分析を試み、これらを読みとることによって、列島の国家形成期ともいえる古墳時代の政治過程を明らかにしようという研究である。

本論文は、序章と本論1～6章、それに100頁にも達しようという関係遺跡文献目録を加え、計530頁で構成されている。

序章では、まず古墳時代研究の流れを、明治期から昭和初期に至る模索の段階、以降昭和30年代までを文化論の展開期として把握し、それから現在に至る僅々30年ほどが歴史論をたたかわす条件の整ってきた段階にすぎないと位置づける。そうではあるが、いま提起されている古墳時代論には、なお古墳をはじめとする考古資料にかかわる年代論的研究を踏まえているとは言い難いものが多くあると指摘している。

ついで本題である政治史論に焦点を絞り、古墳時代とは巨大古墳に葬られた有力者が政治を主導した時代であるから、巨大古墳を広く抽出して、その消長を正しく跡づける作業こそ研究の第一歩であるとの立場を明示する。そしてこの立場から、全長200m以上の前方後円墳を、主として埴輪の編年に依拠しつつ、6段階に区分して、地域ごとにそれらの消長を跡づける。こうして、政治中枢の移動という観点から、Ⅱ期とⅢ期の間そしてⅣ期とⅤ期の間に大きな画期があったとの認識にたち、古墳時代の政治過程を前・中・後三期に大別している。

第1章では、大和東部の勢力が主導する前期の政治体制をとりあげ、その中枢を前期畿内政権の名で表現する。この政権の特質は、その当初を除けば、大和北部など各地に古墳規模の近似した勢力が併存したと推測できるから、連合政権的存在だったと位置づける。ここで目立つのは、各地の

有力者に対する三角縁神獸鏡など、宝器類の一方的配布という行為であったから、大和東部勢力の権威の根源は、神王的存在と認めさせた点にあったろうとする。しかも、この時期には中規模古墳が見当たらないから、有力者だけが卓絶する政治組織だったとも推理している。

政権の基盤ともいべき生産体制では、各地域集団間で重視された青銅製品は、畿内政権の許で集中的に生産されたが、玉類のように原材産出地付近で製品化されるもの、埴輪のように随時生産されるものなどがあり一定しないが、有力者の分掌による体制と想定できるという。

体外関係では、鉄素材の入手に見るように、朝鮮半島との関係が密で、多くの文物がもたらされたが、主管したのは大和西部の勢力だったと考えられる。このような政治機能の分掌が、前期政権の基本だったというのである。

第2章では、Ⅲ・Ⅳ期すなわち5世紀代に展開する、中期政権の特質を論じている。前代にひき続き大和北部・西部の勢力も有力だが、伝心神・仁徳陵古墳に代表される新興の河内南部・和泉北部の勢力が、圧倒的優位性を確立する。二つの勢力が中心である点に不安定感があり、また旧勢力との連合関係も残りはするが、大王専制体制の成立と評価してよい。また、古墳の存在形態は、側近者集団を含む、ピラミッド型の政治組織の成立を物語っているとも指摘している。

中期政権下では、武器・武具の生産が飛躍的に向上するが、その中心は政権中枢の地にあった。須恵器その他の新製品も加え、畿内生産の高揚が顕著だという。

地方有力者との間の宝器の分与関係はもはやなく、実用品の流出が目立つ。なかで武具類の動態は、Ⅲ期まで畿内中心に組織されていた軍事編成も、Ⅳ期には九州・関東の動員態勢強化の方向が強まったことを物語るという。そしてこの政権下で行われた体外交渉では、対中国のそれが顕在化するが、下賜品の入手から、除正を主眼とするものへと変化していた点に注目している。

第3章では、Ⅴ期すなわち6世紀前半に成立した大和西部・河内南部・摂津東部の伝統勢力に、大和南部などの新興勢力が加わる態勢から、Ⅵ期の大和北東部と南部の新興勢力に政治中枢が移行し、安定度をましてゆく政治体制の存在を指摘して、これを後期政権に位置づけている。

この時期の古墳の特色は、群集墳の出現にある。これを政権による、より下層にいたる集団の組織化を意味すると考える著者は、Ⅵ期に実現した政治組織を、より官司制的な専制体制だったと位置づけている。

馬具や飾り大刀などにみる、高度の装飾技術をも吸収・消化した生産部門には、専門性が要求されたが、それには政権下で直接・間接に編成された群集墳の被葬者が深く関係していたから、直轄による生産組織の存在を想定してよいとも主張している。いっぽう、この政権には対中国外交を見かぎり、内治に励む姿が見られ、朝鮮半島南部との文物交流だけが目立ったとも指摘している。

第4章は、1～3章の叙述を基礎づけた、円筒埴輪の全列島の規模における編年試案の提示にあてている。まず埴輪製作の技術と形態上の特色からこれらを5群に分類し、それぞれにつき型式組列・共伴遺物等の詳細な吟味を行ったうえで、各群はそれぞれ「期」という語に置きかえてよいとする。これに小林行雄の提唱を踏襲して実年代を与え、編年を完成させている。それとともに、はじめ畿内からの一方的流出だった埴輪の技術も、Ⅲ・Ⅳ期には地方化も顕在化すると、その政治史

的意義にも注目している。

第5章では、大阪府淡輪地方にみる三世代の首長墓から出土した埴輪の個性を抽出し、ここの首長が5世紀のころ、海上交通の衝にあったと主張している。埴輪を素材とする政治史へのアプローチを模索したものである。

第6章では視点をかえ、弥生時代以降の煮沸用土器に表現される変化の足どりをたどる中で、5世紀代に民衆生活上の画期があったとして、その要因を朝鮮半島の生活様式に求めようとしている。

審 査 の 要 旨

本論文の評価すべき点は2つある。その1つは、円筒埴輪の全国的編年網の作成に成功したことにある。普遍的であり、かつ発掘作業を経なくても採集できる円筒埴輪による、この年代決定法の完成により、陵墓古墳等の位置づけも可能となるなど、学界に裨益する所大であった。発表後10年を経た今日も、「川西編年」の名で評価は定着している。

評価の第2は、上記編年を駆使するとともに、古墳・諸副葬品の個々に対する詳細かつ厳密な型式学的検討結果をも重ねあわせ、諸資料に確かな年代学上の根拠を与えた上で、これからうかがえる政治構造の諸段階を明示した点にある。後述する不備はあるにせよ、遺跡・遺物からする政治史研究を志向した意欲をも合わせて評価されるべきだろう。

だが、本論文には今後に残された課題も少なくはない。政権中枢の分析に力点をおくあまりに、独自の分化の存在が見られるという地方との関係把握に不十分さが生じたのもその1つである。また、「序説」と銘うつ標題が示すように、著者の主眼は考古資料による政治史の諸段階を明示することにあったと思われるが、なお、総合的な歴史叙述に至っていない点は銘記すべきだと考える。

方法的にも、300年にもわたり継続的にみられた巨大古墳の存在形態、また多様なあり方をする群集墳など、諸資料に対する分析視角がやや固定的ではないか、との危惧もある。

それとともに、詳細な個別資料の分類・編年に裏付けられて提示された本論文の年代観が、なお必ずしも全面的な賛同が得られたとは言い難い点にも思いをいたす必要がある。その要因の1つは、著者が師と仰ぐ小林行雄博士の年代論を、あえて十分には検討しなかったと推測される点にあるように考える。

以上、本論文には多少の不備もあるが、著者による円筒埴輪の分析という未踏の領域の開拓と、広範にして細密な年代学的検討の成果は、考古学の方法による古墳時代政治史研究の基礎を構築したといえ、学界への貢献も大であると認められる。

よって著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。